2001（平成 13）年度　東京大学　入試問題　第１問　解答例

一　筆者は、異文化である日本文化の内実に至る障壁にも困難な手段にもなる美しい日本語自体を、直接小説に書きたかったから。（～小説に書きたいという点。）

二　日本人に生まれた大概の者が、自民族の特性として共有し、純然たる内実にいる自己を当然視する、感性を支配された母国語。

＊「～日本語」とは「どのようなものか。」と問われているのであるから、解答として「……な日本語。」では不可。「日本語」そのものの説明が必要である、ここでは「母国語」。

三　日本語を生来共有しない者は、原理的に日本語を外国語として客観的に鑑賞するのみで、日本人同然には書けないということ。

＊「永久の「読み手」でありつづける」は、「決して書き手にはなれない」ということ。

四　在日外国人として民族特性は共有しないが、日本で生まれ育って獲得した、日本語による世界の感知を自然とする言語感覚。

＊「おおよその日本人」ではなく（外国籍）、「母国語」でもないが（韓国語）、日本語ネイティヴ（在日）として、「日本語で世界を感知」できる言語感覚を有しているということ。
＊ただし、イ・ヤンジの具体例のままで書かないこと。

五　筆者は中国で英語と中国語の記憶をもつ主人公の私小説風作品を日本語で書こうと考えたとき、母国語の英語が記憶の一部と化した。帰京して英語と中国語の声を想起するうちに異文化であった日本文学も記憶と化し、日本語で世界を感知する感性を得たということ。（一二〇字）

＊（李良枝のようなケースとは異なるが、それらに匹敵するような意味での）「日本語の感性」を、アメリカ人である筆者がついに手に入れた、すなわち、**「日本語で世界を感知」できるようになった、ということへの言及のない解答は、不可**。「日本語がグローバルなものになった」といった意味ではなく、外国人の筆者が日本語作家としての自分の

位置を見出すようになったといった心理的社会的な自己同定の問題でもない。

＊「筆者の体験に即して」、「二つの大陸の声を甦らせようとしているうちに」「（母国語の英語も、外から眺めていた「Japanese literature」すら）記憶に変わ」っていったことへの言及が不可避である。したがって、**「記憶」もしくは「想起」という内容への踏み込みのない解答は、不可**。母国語の英語が記憶と化すとすれば、記憶を想起している現在の意識は何語なのか？　これが「日本語としての私」の成立であろう。その推論を「述べよ」という設問要求によって求めていると考えられる。

六　a　激励　　b　排除　　c　普遍　　d　媒体　　e　崩壊

Copyright 2024 - 現代文 まなびの礎 All Rights Reserved.　作成者　中野芳樹